『恨の介』における恋愛譚の位相

――「稀代の恋路」を緒にして――

松岡　歩

一

作者未詳の近世初期小説『恨の介』は、周知の通り、写本、古活字本、整版本、の三形態で伝わっている。[注1] 写本および古活字十行本・十二行本の三本については、祖本を別にするものの、同系統であると考えられている。整版本には、これらの本文とは大きな異同が見られるが、本稿では、最も古態に近いと考えられている写本を底本とし、私に古活字版との校訂を行った本文を用いることとする。[注2]

さて、これまでの研究史には、大きく二つの流れが見られる。その一は、物語中の豊臣秀次事件の挿話や、大規模な美人尽くし、また、その当時はまだ珍しかった当代風俗の豊かな描写などにのみ、文学的価値を置いてきた従来の見方に反論する、松田修氏の「『うらミのすけ』をめぐって」[注3]に代表される説である。松田氏は、『恨の介』が慶長十四年の宮廷密通事件のニュースのアレンジメントであるという説を説く。以後、横山重氏も古典文庫『初期仮名草子集』[注4]において、松田氏の論を全面的に引き継ぐ形を取った。また、野間光辰氏は、『恨の介』のモデルは禁裏女房との密通が露見し、慶長十一年に改易された旗本・松平若狭守近次であると主張する等、昭和三十年代は、モデル論が展開された時代であった。さらに、田中伸氏は、秀次事件の妻妾達の自害、菖蒲の前・後家・紅の死に着目し、作中の恋物語は殉死場面を設定するために借りられた形とする論を展開している。『恨の介』の恋物語を史実の中に見出そうとする姿勢は、一つの潮流を築いたと言える。[注5]

もう一つの流れの代表的なものに、鈴木亨氏の論[注6]が挙げられる。鈴木氏は、恨の介が「心細き者」であり、雪の前が木村常陸守の遺児であることから、二人を新時代を否定している「日陰者」だとし、二人の恋を「日陰者同士の恋」であるとする論を唱えた。鈴木氏のこの見解は、モデル論を離れて、物語の内実へと研究の目を向けた点、松田氏論に比肩するほどの画期的なものであった。そして今日も、物語の内実から作品を読み解こうとする流れは継承されている。本稿もそれに連なる立場をとりたい。

『恨の介』に描かれた二人の恋路については、市古貞次氏が、『恨の介』は中世初期の小説の流れをひく作品の恋愛物の劈頭に位置する、[注7] とするように、その中世性が指摘されている。野間光辰氏も以下のように述べている。[注8]

何となれば、恋物語に仕立て上げるためには、恋物語の約束、

型というものがあったからである。たとえば『十二段草子』や『朝顔の露』のごときがそれで、その型にあてはまらぬものは、鑑賞に値するものとは認められなかったのである。したがって徳川の旗本松平近次をモデルとしながら、出来上がった物語は、清水のめぐりあい、観音の御夢想、後家のなかだち、恋の文遣い、近衛殿忍びの段、後朝の別れ、想い死という、まったく中世風の典型的恋物語になっているのである。

同様の指摘は多く、[注9]恋路の筋立てが従来の典型的な恋物語の要素を含んでいることによって、『恨の介』の恋路もまた、中世風の恋物語の典型であるという。果たしてその通りなのだろうか。本稿では、二人の恋路を本文に即して読み解いて行きたい。

二

『恨の介』に描かれた恋路の内実を見ていく前に、物語末尾における評言部分を確認しておこう。

生々のだれかしらん。其の釈尊も栴檀の煙にはのがれ給はず。生は死する本来の面目なり。身を観ずれば、岸の額に根を離れたる草、命をろんずれば、江の辺に繋がざる舟、皆これ戯論妄想の種、嘆くべきにもあらずとて、黒谷より上人を申奉り、野辺の送りと聞ける。雲の上人たちの仰せには、「稀代不思議の恋路の死になれば、雪の前殿の骨つぼねに、くはしく、みなくの事を、菖蒲もかき、紅も書付て、をきたる事よ、あらためしなき事なるかな」との給へば

物語中、恨の介と雪の前の恋路は、雲の上人によって、「稀代不思議の恋路の死」と評されていることが知られる。ここで、稀代とはどういう意味なのか。『日葡辞書』[注10]では、

Ｑｉｔａｉキタイ（希代）
すなわち Ｙｏｎｉ Ｍａｒｅｎａ ｃｏｔｏ．（代に希なこと）
奇異なこと、あるいはめったにない、不思議なこと

とあり、「めったになく世に希な、不思議な恋路」と解される。

では、恨の介の恋路は、一体何を以て「稀代」とされたのか。以下、「稀代不思議の恋路」をキーワードに、恋路の内実を見ていくこととする。

『恨の介』では、雪の前たちの死の現場を見つけ、先ほど「稀代不思議の恋路」と評した雲の上人達が、その死を嘆く様子が描かれている。

彼文を御覧じて、後こそ思ひ合せたり。古の柏木の右衛門はかなく成し恨、げに三の宮のあだ夢のけぶりくらべと申ども、これにはいかで増さるべき。しんに一實中道の車は無二無三のかどにとゞろき、鳥のはやしにあそぶに似たり。生々のだれかしらん。其の釈尊も栴檀の煙にはのがれ給はず。生は死する本来の面目なり。身を観ずれば、岸の額に根を離れたる草、命を念ずれば、江の辺に繋がざる舟、皆これ戯論妄想の種、嘆くべきにもあらずとて、黒谷より上人を申奉り、野辺の送りと聞ける。

柏木とは、『源氏物語』の柏木の中将を指し、柏木と女三宮との恋路は、中世王朝物語において、悲恋遁世譚の典型とされ、鎌倉・室町の物語、草子類にも、伝統的な型として間々見られるものである。『源氏物語』[注11]における柏木と女三の宮の恋物語は、柏木が、女三の宮を垣間見ることからはじまる。それからというもの、柏木の女

三の宮への想いは募るばかりであった。ついに柏木は光源氏の不在に乗じ、小侍従の手引きによって女三の宮のもとへ忍び入り、強引にこれと通じる。一方、『恨の介』においても、清水の宴での垣間見の見染めから、庄司が後家・菖蒲の前の手引きによる逢瀬という筋を辿る。見染め→恋の仲立ち→逢瀬、という共通の展開が見られるのである。

罪の意識に苛まれ苦悩の日々を送っていた柏木は、やがて女三の宮が懐妊したことを知り、より一層、罪深さにおののくことになる。『恨の介』では、後朝の別れにおいて、雪の前が発した「後生にて」という言葉を拒絶の意味にとった恨の介が、苦悩の末、臥してしまう。男主人公の苦悩という点も同じ筋立てである。

柏木は、光源氏の計画した朱雀院の賀宴の試楽の夜、病を押して参上する。しかし光源氏の愚痴ともつかぬ言葉に致命的な打撃を受け、重い病に臥す身となる（若菜下巻）。柏木は、残された道は死しかないと一途に思うものの、女三の宮への執着を断ち切ることもできず、小侍従を介して心の内を宮に訴える。そしてそれが彼の最期の文となる。柏木はその後、宮の出家を知ると、重態となり死んでしまうのであった。一方の恨の介もまた、病床にて雪の前への恋慕の情を込めた最期の文を書き、死んでいく（柏木巻）。

以上に述べた柏木と恨の介の類似点をまとめると、〈表一〉のようになる。〈表一〉は、『源氏物語』の柏木の恋路と『恨の介』の恋路を、筋立てに沿う形で私に示したものである。筋立てに挙げている要素は、従来の先行研究において指摘されるものを参照し、私に設けた。

右のように見てくると、両作品の恋路は概ね共通しているように感じられる。『恨の介』に描かれた恋路は、見染め→仲立ち→逢瀬→後朝の別れ→男主人公の苦悩→最期の文→死、と悲恋遁世譚の王道から、なんらの逸脱も見られない。従来の指摘が、恨の介の恋路を典型的な恋路と位置づけてきたのも頷けるであろう。

〈表一〉

	見染め	仲立ち	逢瀬	男主人公の苦悩	最期の文	男主人公の死
『源氏物語』柏木	六条院の蹴鞠	（担い手）小侍従	葵祭の御禊の前日、源氏の不在に乗じる	罪の意識 懐妊 ← 重い病に臥す	女三の宮への恋慕の情をこめる	女三の宮の出家 ← 重態 ← 死
『恨の介』恨の介	清水の万灯会	（担い手）後家・菖蒲の前	月見の管弦	拒絶の言葉に絶望	雪の前への恋慕の情をこめる	「後生にて」の言葉に絶望 ← 恋死

しかし、ここで注意したいのは、以上があくまで男主人公の視点で捉えた考察であることだ。恋路のシテである男女の、一方だけを考察したのでは、恋路の内実を正確に捉えたとは言えまい。両作品の恋路を考察するのであれば、女主人公についても考察すべきであろう。

三

では、今度は女主人公の視点から、両者の恋路の様態を考察していこう。『源氏物語』の女三の宮は、前に述べたように、源氏の不

在に乗じ、小侍従の手引きによって押し入った柏木と、関係を結んでしまうものの、柏木の一途な思いにいたわりの言葉を投げかけるようなこともない。柏木はそれでもひたすらに「あはれ」の共感だけでも、と求め続けるのだった。やがて重い病に臥せた柏木は、最期の文を送る。

柏木「いまはとて燃えむ煙もむすぼほれ絶えぬ思ひのなほや残らむ

あはれとだにのたまはせよ。心のどめて、人やりならぬ闇にまどはむ道の光にもしはべらむ」と聞こえたまふ。…（中略）…泣く泣く、小侍従「なほ、この御返り。まことにこれをとぢめにもこそはべれ」と聞こゆれば、女三の宮「我も、今日か明日かの心地してもの心細ければ、おほかたのあはればかりは思ひ知らるれど、いと心憂きことと思ひ懲りにしかば、いみじうなむつつましき」とて、A さらに書きたまはず。…されど御硯などまかなひて責めきこゆれば、しぶしぶに書きたまふ。…（中略）女三の宮「心苦しう聞きながら、いかでかは。ただ推しはかり。残らむ、とあるは、

a 立ちそひて消えやしなまし憂きことを思ひみだるる煙くらべに

後るべうやは」とばかりあるのを、あはれにかたじけなしと思ふ。

柏木が長く病に臥し、明日をも知れない身と知りながらも、女三の宮の態度はどこまでも冷ややかであった。右引用の二重傍線部Aのように返事の文を書こうともしなければ、柏木が切に求めた「あはれ」の言葉をも口にすることはない。強制的に書かされた文中の返歌（波線部a）についても、柏木が燃える恋心からの煙と詠んだのを「憂きこと」とし、自身の胸中の辛さや苦しさを吐露するばかりである。

それからまもなく、女三の宮は、男児（後の薫）を出産した後、出家し、此岸での男女の契りの許されぬ身となる。宮が若くして、しかも幼子がいるにも関わらず出家の道を選んだことは、柏木に対しての強い拒絶を意味しよう。女三の宮の意図の対象が、柏木に対してのみではなかったとしても、柏木にとっては自分への拒絶と受け取られるには十分な仕打ちであった。また、柏木の死を知った際も、宿縁を思って落涙するに止まるなど、女三の宮には一貫して、柏木への想いを読みとることはできない。

『恨の介』の雪の前の場合はどうか。雪の前は、育ての親である庄司が後家や兄弟の契りを結んだ菖蒲の前の勧めによって、戸惑いながらも恨の介からの恋文を受け取る。心のこもった文に心動かされた雪の前は、みずから返事を遣わし、一夜限りの逢瀬を約束する。さらに後朝の別れにおいては涙を流し、恨の介に、他の誰とも契らないとの言葉をもかける。互いに涙にむせぶこの場面からは、雪の前の恨の介への想いが確かに読みとれる。男主人公の最期の文を受け取る場面を見てみよう。

この文を姫御覧じて、「これは何事ぞや、恨めしや。菖蒲殿も聞き給へ、その暁、自らに恨殿宣ひしは、「又いつぞ」とありし時、ただ大方に思ひ、「後生にて」と申せしを、歎き給ひ、かく空しくならんとは、夢とも知りまゐらせず」とて、B 涙を流し給ひし…（中略）…や、ありて、この姫の仰せられけるやうは、「一世に人を殺しては、七生までの罪と聞く。我ゆゑ消

え給ふ事、返すがへすも痛はしや。かくとだに思ひなば、いかなる神仏の御引き合わせも恨めしや。甲斐なき女を思し召し、かく宣ふ事とのみ、やる方もなき恨殿」、b心の内思ひやられて今更に、消え入り給ふとは思ひしに、あまりに思ひ堪へかねて、「あつ」とばかり宣ひて、終に空しくなり給ふ。

心を通わせ、再度の逢瀬は叶わないながらも、一生の恋人と思っていた男の死に衝撃を受ける雪の前の様子が見て取れる。それに追い打ちをかけるように、恨の介の死が自身の発した言葉に起因することを知り、雪の前の涙はさらに溢れる（二重傍線部B）。時間が経っても動揺は消えることはなく、なお一層増すかのように、恨の介の心情が思いやられ、遂に耐えられなくなった雪の前は死んでしまう（波線部b）。雪の前は恨の介のことを深く愛していたからこそ、その死は耐え難いものであったのだ。このように見てくると、雪の前の死は、想いの深さゆえに導かれた死と解されるであろう。

以上、女主人公の視点での恋路の様相を、筋立てに即してまとめたのが〈表二〉である。〈表二〉は、『源氏物語』と『恨の介』の恋路を女主人公の視点で見たものを筋立てに沿う形で示したものである。なお、筋立てには、両者の恋路の様相が明解に表れていると思われる要素を私に挙げたものである。

〈表二〉

筋立て	逢瀬	罪の意識	男主人公の最期の文に接しての態度	女主人公の死（出家）[注12]
『源氏物語』女三の宮	男主人公の企図によるもの（受動的）	光源氏を裏切ってしまった事への恐怖	同情も示さず小侍従により強制的に返しの文を書く	罪の意識に耐えきれず出家
『恨の介』雪の前	自らの意志によるもの（能動的）	自らの発した言葉によって死ぬという罪業の深さ	衝撃を受け、死へと導かれるに至る要因となる	男への愛ゆえに導かれたもの

『源氏物語』における逢瀬は、柏木が忍び込み果たされたもので、女三の宮はあくまで受動的であった。突然の、半ば強制的な逢瀬であったにせよ、一途な愛の告白に対し、女主人公が同情を抱くことは、王朝物語にしばしば見られることである。しかし、女三の宮は柏木が最期を迎えたときでさえ、同情すら示さず、柏木に情を寄せることはついになかった。逢瀬の後、罪の意識に苛まれるが、それは柏木への思いからではなく、光源氏への裏切りを恐れた罪の意識であり、最後にはそこから逃れるかのように出家をするに至る。そうした女三の宮は、男主人公の愛に応えることもなく、何らの情をも寄せず、ただ我が身の不運を嘆くだけの、受動的な女性と解されよう。

一方、雪の前は、恨の介からの文を受け取り、心を動かされ、謎かけという手段を用いながら、恨の介に一夜の逢瀬を約束する。恨の介の望みが、せめて憐れと思ってほしいという控えめなものであったにも拘わらず、雪の前が自らが主体となって逢瀬を約束したということは、注意すべき点である。なぜなら、雪の前は、恨の介との

恋に能動的であったと解されることになり、二人の恋路の解釈に、女主人公の意志が明確に認められることになるからである。雪の前の、恨の介への確かな愛情が認められればこそ、最期の文を読んだ時の量り知れない衝撃が、雪の前を死へと導いたと解釈されることになろう。

四

以上、『恨の介』の恋路を『源氏物語』柏木のそれと引き比べながら辿ってきたが、『恨の介』のように、恋ゆえに男女ともに死を迎えるという作品は、『源氏物語』以後の王朝物語において他にも見られるものなのだろうか。本章では、『源氏物語』以後、鎌倉時代～室町時代に至るまでに成立した悲恋遁世譚と照らし合わせて考察してみたい。

さて、従来、恋物語は男主人公の視点から解釈されるのが通例であったが、女主人公の視点も導入しつつ解釈していくのが本稿の立場である。恋物語の典型のひとつ、貴種遁世譚を対象とする場合も、男主人公・女主人公、双方の出自を考慮に入れることとしよう。

『鎌倉時代物語集成』[注13]及び『室町時代物語大成』[注14]に収められた物語の中から、男女ともに死ぬ、もしくは出家するという恋路が描かれている物語を抽出した結果、『海人の刈藻』『風につれなき物語』『いはでしのぶ』『苔の衣』『しのびね物語』『夢の通ひ路』『朝顔の露の宮』『桜の中将』の八作品が得られた。〈表三〉は、各作品の恋路の結末を男主人公・女主人公に分けて示したものであり、恋の想いによる死、または恋の想いによる出家遁世は、便宜的に▒で表示している。まずは、各作品の筋立を、男主人公の視点で追いかけてみよう。

〈表三〉

作品名（成立年代）	男主人公 人物名	結末	女主人公 人物名	結末
源氏物語（平安中期）	柏木中将	焦がれ死（病死）	女三の宮	出家
海人の刈藻（平安末～室町末か）	中納言（三位中将）	出家	藤壺の女御	病に臥す
風につれなき物語（鎌倉前期）	帝（若君）	失恋による出家	妹姫	出家
いはでしのぶ（鎌倉前期）	入道親王	妻の死による出家	北の方	自然死
	内大臣	妻の出家による死	一品の宮	出家
苔の衣（鎌倉前期）	右大将	妻の死による出家	北の方	病死
しのびね物語（鎌倉前期あるいは室町初期）	きんつね	思いが遂げられず出家	しのびねの君	出家せず
夢の通ひ路（南北朝頃か）	権中納言	焦がれ死（病死）	三の君（藤壺の女御）	受戒
朝顔の露の宮（室町末か）	露の宮	姫の失踪による出家 姫の死による自害	朝顔の上	病死
桜の中将（室町か）	桜の中将	出家せず	大宮の姫	思い死
恨の介（江戸初期）	恨の介	焦がれ死（病死）	雪の前	気死

『海人の刈藻』に描かれた恋路は、柏木・女三の宮型の悲恋によって、男主人公である三位中将が出家するものである。『風につれなき物語』の男主人公の帝も、恋の相手だった妹姫が出家してしまい、恋に絶望して出家する。また、『風につれなき物語』と同時代に書

かれたとされる[注15]『いはでしのぶ』でも、入道親王は北の方を早くに亡くしたことを嘆いて出家し、内大臣は妻である一品の宮が出家してしまったことに絶望し死去する。『苔の衣』の右大将も、北の方の病死によって出家する。『しのびね物語』のきんつねも、『朝顔の露の宮』の露の宮も、恋の相手の出家や死によって思いが遂げられずに出家してしまうのである。『夢の通ひ路』では、権大納言は三の君に恋焦がれた末病死し、三の君も出家を遂げる。

男主人公に着目すると、その死や出家は、おおむね、女主人公の死や出家という、恋の思いが遂げられないことに起因していた。男女ともに、その恋路の結末として死んだり、出家する話型は、確かに数多く存在するようである。それでは、男主人公の死や出家の原因となった、女主人公の死や出家の原因は何だったのか。

『海人の刈藻』の藤壺の女御は病に臥すが、それは『源氏物語』の女三の宮と同様、意に反して、男が物の紛れに忍び込んだことへの驚きと悲しみが原因であった。『風につれなき物語』の妹姫の出家[注16]、『いはでしのぶ』の北の方の死・一品の宮の出家[注17]も、男主人公との恋愛を原因とするものではなく、前者は世を儚んだ出家、後者の北の方は自然死、一品の宮の剃髪は世の中への絶望に基づく出家であった。男主人公の死の原因となる、女主人公の死や出家が、男主人公への愛情に起因するわけではない点は特に重要である。女主人公の視点から見ると、悲恋遁世譚と呼ばれる恋路も、相思相愛ゆえの悲恋の物語ではなくなってくるからだ。

見てきたように、悲恋遁世譚において、男女双方が相手への恋慕の情ゆえに死ぬ、という恋路は、決してよくみられる型ではなかった。そうすると、「相思相愛の結末の死」にこそ、『恨の介』の恋路の新しみを認めるべきであろう。

右のように一応結論づけたうえで、〈表三〉において唯一、『恨の介』の恋路と同様、男女ともに死や出家が相手への思いに起因する物語であった、『夢の通ひ路』の恋路を詳しく見てみることにする。

『夢の通ひ路』の男主人公・権大納言は、嵯峨野で女主人公・三の君の姿をかいま見たその日から思慕を募らせ、やがて互いに文を交わすようになった。しかし、男は心ならずも院の二宮との結婚を迫られ、三の君も入内することとなり、二人は遂に結ばれない。三の君はやがて三の御子を産むが、それは実は権大納言の子であった。はかない恋を嘆き病んだ権大納言は苦悩のうちに死去し、三の君も受戒してしまう。

『夢の通ひ路』において、男主人公は恋の不成就ゆえに死去し、女主人公は男の死ゆえに出家する。その恋路は、男女双方が相手への恋慕の情を募らせた結果の悲恋物語で、『恨の介』の恋路と何ら変わらないように思われる。しかしながら、『夢の通ひ路』の三の君は、自ら望んで出家したのである。それはつまり、俗世での死を選んだということになる。一方、『恨の介』の雪の前はどうであったか。その末期は次のように描かれている。

心の内思ひやられて今更に、消え入り給ふとは思ひしに、あまりに思ひ堪へかねて、「あつ」とばかり宣ひて、終に空しくなり給ふ。

右によれば、雪の前は、自ら望んで死を選んだのでも、覚悟を決めて死へと向かっていったのでもない。他ならぬ恨の介への想いの深さによって、あたかも導かれるように気死してしまうのである。

物語は、三の君にも雪の前にも、恋路の結末としての「死」を用

意している。だが、両者の「死」の向いている方向性は、全く異なったものだった。『夢の通ひ路』の三の君は、自ら望んで「死」へと向かっていった。『恨の介』の雪の前には、相手への思いによって「死」が襲いかかったというべきである。

『恨の介』の恋路は、相思相愛にかたどられた男女双方の死を描き出したことによって、それまでには見られなかった、新しい悲恋物語を成立させている。物語末尾の「稀代不思議の恋路の死」は、そのような文脈で理解すべき評言と思われる。

五

『恨の介』の恋路が、その筋立において伝統的で常套的な枠組みに収まっていることは、従来の先行研究に指摘される通りである。これに対し、本稿では、女主人公の視点から物語の内実を再考することで、『恨の介』の恋路が悲恋遁世譚の典型から逸脱したものであることを明らかにしてきた。さらに、悲恋遁世譚の流れと照らし合わせることで、相思相愛ゆえの死にこそ、時代を画す新しみを見出すべきことを指摘した。

以上に論じてきた『恨の介』の新奇性は、以後、近世に誕生する物語や草子のなかに、ひとつの型として受け継がれていったのかどうか、その理由は何か、といった問いかけは、すべて今後の課題である。

（注1）伝本には、信州大学人文学部所蔵の写本、天理図書館蔵の古活字十行本、横山重氏旧蔵の古活字十二行本、寛永版緑丹本ほか、明暦二年正月京都高橋清兵衛開版本、寛永四年三月京都山本九左衛門版本等がある。なお、渡辺守邦氏「新出古活字版『うらみのすけ』の影印と解題―新収資料紹介をかねて」（『別冊年報』第8号平成6年）によれば、実践女子大学文芸資料研究所蔵の古活字十二行本が新たに見出されたという。横山氏旧蔵本とは小異があるが、おおむね同一本であるらしい。

（注2）前田金五郎氏編の日本古典文学大系『假名草子集』（昭和40年　岩波書店）では、古活字版本を底本としている。他の諸氏も写本によって誤字・脱漏を補う立場をとりながらも、古活字版本を底本とするものが多い。しかし、野間光辰氏は、日本古典文学鑑賞講座『お伽草子・仮名草子』「『恨の介』解説」（昭和38年　角川書店）で、以下のように指摘している。

写本は信州大学文理学部所蔵のもので、書中にまま誤字・脱漏がみられるものの成立後間もないころのものであり、整版本によって改変せられる以前の原形を伝えるものとして、古活字本とともに尊重されている。

本稿では、この野間氏の立場に賛同しつつ、横山重氏・森武之助氏共編の近世文藝資料『初期仮名草子集』（古典文庫昭和35年）所収、写本『くすのうらみのすけ』（仮題）を底本とした。

（注3）松田修「『うらミのすけ』をめぐって　仮名草子から浮世草子へ」（『国語国文』昭和30年12月）

（注4）横山重・森武之助共編　近世文藝資料『初期仮名草子集』（古典文庫　昭和35年）

（注5）野田寿雄氏「『恨の介』解説」（日本古典全書『仮名草子集上』昭和35年　朝日新聞社）・「『うらみのすけ』論」（『近世初期小説論』昭和53年　風間書院）や、水田潤氏「『うらみのすけ』の文芸構造」（『仮名草子の世界―未分化の系譜―』昭和56年　桜楓社）などがある。

（注6）鈴木亨「『恨の介』における愛と死」「『恨の介』と『薄雪物語』」（『島根大学文理学部紀要』11号　昭和52年12月）

（注7）市古貞次「近世初期小説の一性格」（『国語と国文学』昭和26年4月）

（注8）野間光辰「『恨の介』解説」（日本古典文学鑑賞講座『お伽草子・仮名草子』昭和38年　角川書店）

（注9）その他、水田潤氏も「『うらみのすけ』の文芸構造」（『仮名草子の世界―未分化の系譜―』昭和56年　桜楓社）において同様の指摘をしているところである。

（注10）引用は『邦訳日葡辞書』（昭和55年　岩波書店）による。

（注11）『源氏物語』新編日本古典文学全集（平成8年　小学館）

（注12）遁世（出家）と死の解釈については（注7）市古貞次氏の説によった。

さてこのような恋の破局の次に来るべきものは、中世の小説にあつては、出家遁世であった。「忍音物語」「桜の中将」等々の公家の恋愛談は、概して遁世結ぶのがつねである。…（中略）…しかし、現実主義の近世にあっては、もはや遁世ははやらないのである。戦國の余燼のなほ収まりやらぬ近世初期の主人公は死を選ばねばならなかった。ここに中世から近世への過渡期における小説の主人公のあり方があるとおもう。…（中略）…「恨の介」の場合、恋死は、いかにも力が弱く古風であるけれども、これによって女主人公の雪の前の悶絶頓死（ママ）導き出されるのである。中世における遁世（出家）の意味が、近世においては同じ意味合いを持たず、必然的に死が選ばれるということは十分に考え得ることであろう。よって本稿では、近世以前成立の作品における出家と、『恨の介』における死を同様に捉えている。

（注13）『鎌倉時代物語集成』第一～六巻（昭和63年　風間書院）

（注14）『室町時代物語大成』第一～五巻（昭和48年　角川書店）

（注15）『日本古典文学大辞典』（昭和59年　岩波書店）「いはでしのぶ」「風につれなき物語」の項による。『いはでしのぶ』の成立は嘉禎元年～建長三年までの間、『風につれなき物語』の成立は建久九年から建仁二年以後、文永八年以前。

（注16）『風につれなき物語』現存本には、帝・妹姫ともに出家の記述は見られないが『風葉和歌集』により補った。

（注17）『いはでしのぶ』の一品の宮は、噂による誤解と、大宮の死に接して出家する。その原因に夫の心変わりという要素が含まれてはいるものの、実際にはそれのみならず、大宮の死も大きな要因であったと考えられる。よって、結局のところは、世をはかなんでの出家と解されるであろう。

〔付記〕

本稿は、平成十八年度山口大学人文学部国語国文学会での口頭発表に加筆したものである。席上及び、発表後に諸先生方からご指導、ご意見を賜わった。この場を借りて、深く感謝申し上げたい。

（まつおか・あゆみ）